

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 32 号

平成16年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

南原繁著作集第10巻より(5)

『矢内原忠雄 信仰・学問・生涯』のまえがき

彼の本命は、何よりも終始一個のキリスト教信徒、否、それ以上にキリスト教真理の証示者、伝道者としての活動であった。そうした生涯において忘れてならないのは、若き日。旧一高において感化教導を受けた新渡戸稲造先生とともに、キリスト教の純粹福音を教えられた内村鑑三先生である。それは、まさに彼の人生における「出会い」であって。それなくして、彼の性格はそのようには形成されなかったであろう。...

思い起こすのは、彼が最後の病床にあって、墨痕あざやかに自ら書いて壁にかけてあった聖句である。その一つは「神はわれらの避け所、また力なり。悩める時のいと近き助けなり」であった。ここに個人の生の秘密があり。あのファシズムの嵐と戦争の時代に、なにものをも恐れず、迫害に屈しないで闘った勇気も、また彼自身「生涯の最大の敵」と称した病に最後まで耐えおおせた力も、その源はここに在ったのである。

彼の死後、祖国は種々の点に於いて変貌をとげつつある。その最も憂えられるのは、敗戦を境として、我々が一旦誓った精神的変革と自由の理念の後退、ないし退嬰である。新しい民主政治の体制には必ずや新しい精神が盛られなければならない。日本は今こそ彼に

生きて欲しかったし、我々は彼を懐うこと切である。この書が全集と共に、心ある人々によって広く読まれ、真の日本の再建に役立たんことを願ってやまない。

坂田祐兄を送る

坂田さん。(昭和44年)12月16日夜の明け方。私はいつになく早くから起きて、ものを書いていたとき、けたたましく電話が鳴って、全く思いも寄らず、貴兄の訃報が伝えられました。瞬間、天上のどこからか君の声が聞こえるように思われた。「南原君。僕はとうとう。ここに来ましたよ。いろいろお世話になりました。……」と。私はとめどなく涙が流れてどうすることもできなかった。

憶えば、六十余年の昔。われわれが一高から東大に学んだころ、許されて柏木の内村鑑三先生の門をくぐった同志は7人。先生が詩篇の聖句から引用して。この小さき群を「白雨(はくう)会」と名づけられた。われわれはワアーズワースの詩"We are seven"に因んで「我らは七人」と呼びなし、将来どこに往っても、またそのうち誰が欠けても、常に七人であろう、と誓い合ったものである。

われわれの最年長者であった君は、いつも同志の間の指導者であり、また長老として世話役でもあった。われわれが大学を出て新家庭を持ったとき媒酌を、またその子らが長じて結婚するときの司式を、それぞれお願いしたこともしばしばであった。また同志の者やその家族が世を去ったときも、告別の司式をしてくれたのは君であった。かく云う私自身、妻を娶ったとき、そしてその妻が死んだとき、ともに君の厚いお世話になりました。

そればかりではない。同志のうち或る者が夫婦ともに若くして亡くなったとき、あとに残された親なき幼子たちの父とも、後見人ともなって、それぞれを立派に世に出させたのも君であった。ひとり白雨会の同志の間に限ったことではない。自身に子がなかった君には、その恩恵を蒙った他の子女たちが、君を父とし、叔父として、どんなにか慕って来たことであろう。

君は大学を卒業してまもなく。関東学院中学の校長として創立の事業に参画し、以来五十年、今日の大関東学院の発展をもたらした偉大な功績の蔭に、そうしたひとり人間とし、人として尽くした

愛の業は、天の記録に誌されていることでありましょう。由来、君は不言実行の人であった。一生を通じて著書は唯一冊『恩寵の生涯』(昭和41年2月発行)があるだけ。それも編集者の懇請を断りかね、謙譲にももし伝道の一助にもなるならばと云って、ついに承諾されたものである。このようにして君の公私の生涯は、すべて福音の真理の証示のためにささげられたのであります。

近年君と会う度毎に、私が言っていたことは「わたしの告別式も君にお頼みする」と。だが、自然の順次はいかんともしがたいものか。かって壮んなりしころ、馬術の達人、近衛騎兵曹長として、また日露戦争のとき奉天会戦の勇士として、その名の聞こえた君も、さすがに最近2、3年、身体の自由は漸く減退し始めたようである。

しかし、肉体の衰弱に反比例して、君の霊と精神は輝きを増し、希望と平安に充たされていた。逝去のわずか数日前、頂戴したクリスマスの嘉信には、いつに変わらぬ字画正しい細字で書き加えてあった、『...老年の私。おもうように動けなくなりましたが。さいわい大丈夫ですからご安心下さい』と。誰が今日。君とのこの世の別れを想像したであろうか。たしかに君は予言者エノクのように、人知れず、また自らも知らない間に、この国から、かの国へ移されたと思う。

承れば、最近とりわけ、毎朝床上、熱心に聖書を読み、祈り、一日一日が聖国への旅の準備であったとのことでもあります。その間、幸いなことは、君には優しい俊子夫人がお健やかでいられて、共に祈り、最後まで君を守り、助け、支えられたことでもあります。かようにして、すべての準備は整って、九十二年の波乱の多い、しかしそのすべてが祝福された君の「恩寵の生涯」は静かに閉じられたのであります。

われわれのあの学生時代から一生を賭けて信じて来たところのものが、今や君の上に成就されたのであります。そこには先だち逝いた師友に、同志に、また妻や夫に、再会の嘉びが、われわれのためにも待っております。それのみではありません。君が若き日、剣を

聖書に換え、新しく教育の道を通して、その実現を望んで已まなかったところの、もはや国と国との戦争のない人類の永久平和も、いつの日か、この地上に成就するでありましょう。またしなければなりません。

我らは七人。白雨会同人の地上に残る者は、唯二人となりました。それでも我らは七人である。私は今、そのほか君を知り、君と親しい多くの友人たちとともに、君が生涯を通して戦った信仰と愛の勝利と、天上の永遠の栄光を讃えて、暫しの別れを告げるでありましょう。

ここに、拙詠三首、挽歌として霊前に献じます。

吾ら七人つらなりて聖書講義聴き入りしころの若かりしかなたまたま
まもの書きあたる冬の夜明け君が訃報は吾を泣かしむ霜凝(こ)ごる
冬の暁(あかとき)妻に支へられ君のみ霊(たま)は天のぼりましぬ

(1969年12月27日、告別の辞)

(注) 南原先生には、私の見解では、心が深く通った3人の親友がおられた。それは、三谷隆正、高木八尺、坂田祐の三氏である。坂田祐氏との関係は、この弔辞に尽きているが、略歴は次のとおりである。

明治11年(1878年)会津浪士の貧家に生まれる。炭小屋の番人。馬子、土工、鋤夫を経て、陸軍士官学校馬術教官、日露戦争従軍後、一高入学。明治44年10月内村門下となり、内村先生の勧めで、白雨会結成後、年長であったこともあり、中心人物となる。大学卒業後、大正8年私立中学関東学院を設立、昭和24年関東学院大学を設置。現在は、関東学院は、幼稚園。小学校、中学校、高等学校、短期大学、大学、大学院を経営する総合学園として発展している。1969年12月92歳で逝去。唯一の著書「恩寵の生涯」は、酒枝義旗先生のたつての勧めで、「待晨」に連載された自伝である。「恩寵の生涯」に掲載されている写真を本号巻末に掲げます。

黒崎幸吉さんのこと

われわれ学生のころ、明治末期から大正前期に於いて、当時の東京市郊外柏木の内村鑑三先生の居に集まった者たちに三つの群がありました。一は「教友会」で最も古く、二は「柏会」、三は「白雨会」と称し最後に生まれた会であります。黒崎さんは塚本虎二・藤井武・三谷隆正・江原萬里・矢内原忠雄らとともに柏会に属していました。私は君より三、四年後輩で、三谷、江原君と同年代であります。白雨会に属し、昨年暮逝去された関東学院の坂田祐氏がその長老格でありました。...

故人の人柄については、君に接した人は誰でも感ずるように、極めて円満、愛と寛容の人であり、且つ常識に富み、実践的でありました。...

最後にご参会の若い諸君に一言申し上げます。黒崎さんをはじめ、われわれの学生時代には、幸か不幸か、政治・社会問題がまだ今日のごとく生活の前面に現われず、われわれの主要な関心事ではなかった。なによりも自己はいかに生くべきか、そこに人間とは何か、そしてついに神の存在の問題に行き着いたものであります。それは決して誤りであったとは思いません。現在いかに政治や社会、そして文明が危機に立ち到っても、否、それ故にこそ、それらの根底に依然として人間の回復と、そして神の発見が要求されていると信じます。...それこそがいつの時代にも変らぬ永遠の課題であり、その緊要なこと、けだし現代のごときはないであります。

この課題と若いときから取り組み、五十年の間『永遠の生命』誌を砦として、真理の証明のために果敢に闘いおおせた君が聖国への凱旋を祝し、ここに暫くの別れを告げるであります。

(1970年6月9日、登戸学寮惜別式における感話)

藤井武さんのこと

彼（藤井武）の本質はむしろ詩人 ミルトンのごとく、またダンテのごとき信仰詩人であった。けだし、内村門下のうち。かような才能に最も恵まれていたのは彼であろう。…

かように、彼をして「永遠の人」「待望の詩人」たらしめたのは特別の理由がなければならない。それは夫人喬子（のぶこ）の死である。実にこの出来事こそは、彼の魂に一代飛躍をもたらし、その双眸と全霊を天界に向けしたところのものである。…

齡四十二、人生の真昼時、陽も赫々と輝いた夏の真盛りに、十有五年の戦いのさ中を、五人の可憐な愛児らを残して、言一語も彼らの上に触れず、黙って永遠の国を仰いで、彼は旅立ったのであった。われわれは彼においてこそ、語の深い意義における「近代の戦士」の面影を見るのである。

伊藤祐之君の生涯

皆さんのうちご経験の方にはおわかりいただけると思うのでありますが、いかに幸福な家庭を営んで、息子さんたち、娘さんたちもそれぞれよき道を選び、また友人・恩師に恵まれましても、人間にとりまして息子・娘・兄弟、多くの友人にもまさり、友の中の友、文字通り生涯の伴侶は妻であります。また妻から見れば夫であります。これを失うことは人生の大事件であります。

南寮八番の思い出

このようにしてかつての（一高）南寮八番の同室生十二人の内、実に十一人が皆世を去って、私が唯一人の残存者となった。これがそれぞれに与えられた運命　人間の運命　というものであろう。ここに、昔ギリシアの賢人が考えたように、われわれ人間には、もともと天上に魂の故郷があって、そこからこの世に来て住み、おのおのの用を終えて、やがてまた皆そこに還って行くものかも知れない。いつの日か、われわれもそこに集まって、互いに久闊を述べ、天上の饗筵には、在りし日の昔を忍んで、懇親コンパを開くことになるかもしれない。時に、そうした夢を見ることもある。

亡き妻

挽 歌

母としてなすべきこと端果たして逝きし妻かも永久とわに思はむ三十八

年はるかなるかも携へて妻とあり経し一生ひとよとぞおもふ

学者われのつつましき家を守り来て一生ひとよつくしし妻としぞ思ふ共に

生きて三十八年わが世には苦しき戦いの年がありき生き死には人の

定めと知れれども妻死にたればわれはさびしゑありし日の君が面影

心にもち現身うつしみ我の生きむとぞする

花を愛でし妻逝きたればこの春は花もさびしく庭に散り行くわが庭

に一本(ひともと)咲ける白椿植ゑしめし人いまはあらず亡き妻の

ために賜ひし赤城つつじほの赤く咲けり雨にぬれつつたづさへて飛

騾高山や乗鞍に登りしことも思ほゆるかなわが庭にけさ咲きいでし

瑠璃柳るりやなぎの薄紫はひとり眺めぬ

瑠璃柳の花はかなしも一年ひととせに二度ふたたび咲きて妻はかへらず